



FROM

高円寺、

愛知、

ブラジル

を終えて

2023年3月3日～5日まで東京芸術劇場アトリエー
イーストで開催された、『FROM高円寺、愛知、ブ
ラジル』。同劇場における「多文化共生とアート
に関するリサーチ（クリエイション）」事業として、
橋本清と山崎健太によるユニット「y/n」が制作
した作品だ。制作期間は約2年間。2022年3月に
実施したトークとパフォーマンス（ワークインプ
ロgress）でのフィードバックも反映し、2023年
3月の本公演に臨んだ。

y/nの二人は、これまでレクチャーパフォーマ
ンスという形式で作品を発表してきた。y/nのレク
チャーパフォーマンスは、語り手が当事者性をも
って話す「レクチャー」と、語り手が演じる「パ
フォーマンス」の要素が絡み合っていることが特
徴だ。観客にはどこがフィクションでどこがノン
フィクションなのか、ただちにはわからない。一
方で観客は、y/nの二人（のいずれかあるいは両
方）に何らかの“当事者性”のある事柄が、テーマ
になっているのだらうと推測して作品に対峙する。
今回のテーマは「多文化共生」。東京芸術劇場に
依頼されなければ、すぐには取り組んでいなかった
テーマだと二人は話す。公演を終え、振り返り
のインタビューを行った。

「多文化共生」というテーマについて

— 東京芸術劇場からの依頼を受け、「多文化共生」という
テーマで作品をつくることになったわけですが、どの
ように作品を立ち上げていきましたか。

橋本清（以下、橋本） 今回の企画は、「海外にルーツをも
つアーティストと多文化共生」という枠組みから始まった
ものでした。その点で、まずはブラジルにつながるのある
僕のルーツを掘り下げていくところからスタートしました。
僕は父がブラジル人、母が日系ブラジル人ですが、母方の
曾祖母が農業移民として日本からブラジルへ渡ったのが
ルーツのはじまりです。そういった自分の個人史や来歴を、
一つひとつ家系図的にさかのぼっていくようにリサーチして、
テキストの形に一旦整理したものをやまけん（※山崎）さん
に共有していきました。パフォーマンスとしてそれらの情
報をどう提示するか。そのアプローチを試行錯誤していく



左・橋本清 右・山崎健太

プロセスだったと思います。今回の場合、依頼された理由のひとつに僕自身の「属性」があったので、まずは僕が語ることを作品のスタート地点にも、そして、ベースにもしました。そういう意味ではy/nのほかの作品と比べ、僕というひとりの人間の「現実」の割合が多くなったと言えるかもしれません。

山崎健太（以下、山崎） 一方で、このテーマでパフォーマンスをつくるなら「多文化共生のこういう現状がありますよね」という話だけをしてもしかたがないという気持ちも最初からありました。多文化共生について考えるといったとき、思考から外れてしまいがちな「死角」にいかにも目を向けてもらうか。観客と同じ時間や空間を共有するパフォーマンスという形式でこのようなテーマを扱う意味があるとすれば、そこだと思っています。

言い換えると、観客の当事者性にどう働きかけられるかということになると思います。今回の作品は橋本くんの当事者性からスタートしていますが、最終的に観客が「橋本くんの話」をただ聞くだけになってしまうのでは意味がない。だから、橋本くんの当事者性はある意味では「解除」されなければならないものでもあります。

ワークインプログレスのときのパフォーマンスでは、橋本くんが投げかけられてきたかもしれない、たとえば「日本語お上手ですね」のようなマイクロアグレッション*的な言葉を舞台上にプロジェクションする演出をしました。終演後のQ&Aで「やっぱり差別はよくない」みたいな感想をけっこういただいて、それ自体はもちろんそうなんですけど、でもその発言は、お客さんの立場が揺らいでいないからこそ出てきたものだと思うんです。そこには差別をす

る側される側、それを非難する側といったそれぞれの立場が変化していく可能性がない。それをどう変えていけるか。たとえば、最近は海外に「出稼ぎ」に出て行く日本の若者も増えていて、日本人が移民の側になるということは想像ではなく現実のものとなっていたりもするわけです。本公演はそういうことを考えながらつくっていきましたね。

橋本 ワークインプログレスでは、お客さんが僕の語りをすごく共感して聞いてくださっているなと感じる瞬間がいくつもありました。共感していただくこと自体を否定するわけではありませんが、「共感」という態度はともすると目の前の僕という人物を「教材」として見てしまう危うさや、僕の語りが消費されていくような感覚も覚えました。感想のなかには「橋本さんの事実ベースの話が上演のなかで強く感じられて、パフォーマンス作品としてどう受け取ればいいかわからない」といった声もありましたが、「当事者性」を扱った作品に対しての重要な指摘として受け止めました。ワークインプログレスのあとは、語り手である僕とお客さんとの関係をどう組み立てていくか、時間をかけて詰めていきました。その結果、本公演ではお客さんの反応にグラデーションが出たように思います。

——公演を終えてみて、多文化共生という言葉に対する考え方は変わりましたか。

橋本 パフォーマンスのなかで、ブラジルの文化の一つとしてといますか、僕が日本で経験した誕生日会のことについて語る場面で、公民館を借りて日本やブラジルの家族や親戚、友人知人を招いて盛大に誕生日パーティーを開く

*マイクロアグレッション 意図的か否かにかかわらず、他者に対して、何気なく発せられる言動に現れる、偏見や差別に基づく見下し・侮辱・否定的な態度のことを指す。

というエピソードを紹介しました。これはいわゆる「コミュニティ」に関する話で、多文化共生の一つでもあると思うのですが、クリエイションの過程であらためて振り返ってみるまではそれが「共生」に関わるものだとは意識していませんでした。

多文化共生といったときに、僕はまさきに海外にルーツをもつ自分と、その自分とは異なるルーツをもっている人たちが共にどう生きるのかという関係性をイメージすることが多いのですが、今回の企画を通して「僕が僕自身のルーツとどう生きるか」ということも多文化共生の一つと言えるのではないかなと思うようになりました。

また、この作品を観て、自分とは異なるルーツをもつ人との関わりを再考していく、ということも必要な体験の一つだと思うのですが、それと同じぐらいに、僕の語りを介して、お客さんがそれぞれのなかにあるルーツやアイデンティティについて考えてもらえていたらうれしいです。

ワークインプログレスから本公演へ向けての変化

— ワークインプログレスの時点で、すでに大筋ができあがっていたと思います。一方でお話しにあったように、ワークインプログレスの反応を盛り込みながら、本公演をつくられたと思います。この1年間は、作品をどのように練り上げていきましたか。

山崎 ワークインプログレスでつくったテキストは、テキストとしてはほぼそのままのかたちで本公演のほうにも組み込まれてはいるのですが、見せ方はけっこう変わって

ます。1年目のワークインプログレスは、ほぼ事実をベースに構成していました。最後の最後で、橋本くんが本人としてではなく移民としてブラジルに渡った橋本くんのおじいさんとして語り出すんですけど、作品としてはそこで終わっていた。それを見たお客さんから、「レクチャーとして“情報”を聞く体験自体はおもしろかったが、パフォーマンスを見た感じがしなかった」という感想を複数いただいて。

y/nとしても、もう少しフィクションの要素を入れてもいいかもしれないと感じていたので、本公演は比較的最初の方から橋本くんがおじいさんとして語る、フィクショナルな語りを入れていくかたちで構想していたんです。でもそれだとうまくいかなかった。レクチャーパフォーマンスという形式は、舞台上立つ人の話を観客が聞くことをベースにしているので、「観客の目の前にいる橋本くんがどういう人なのか」「観客とどのような関係にあるのか」をきちんと伝えないと成立しないことをあらためて感じました。そこから構成を戻してつくり直した経緯があります。

橋本 祖父のパートに入る前に、まずは僕のなかの日本とブラジルについて、また、それぞれとの距離感について、観客と共有するエピソードを語りました。それを踏まえて、その距離感のバリエーションの一つとして、過去の時間や祖父という存在を組み込む、という流れをつくりました。その方がお客さんの想像力をスムーズに誘導できるというか、無理なく遠くへ広げていくことができる。まず1年間、ワークインプログレスに向けてつくり、その後また1年間の時間をかけられたことで、語り手と聞き手の観客との関係を整理して検証ができたのがよかったなと思います。

山崎 本公演では、ブラジルで生まれ日本に来た橋本くん、



y/n『フロム高円寺、愛知、ブラジル』本公演の様子。
舞台上には、左右にホワイトボードが一つずつ配置されている。
橋本の語りをベースにプロジェクターから投影される画像や映像等を使い、パフォーマンスが展開された。

日本から移民船でブラジルへ渡ったおじいさん、そして目の前に居る日本のお客さん——その関係性が変化しうるポイントみたいなものを、全体の流れのなかで複数つくることを意識しました。具体的に変えたところとしては、そこが大きかった。「僕がブラジルに向かう2年前……」という語りで橋本くんはしれっとおじいさんになっていくんですけど、それはともすればお客さんに気づかれないぐらいの感じで。目の前で話している人の立場がいつの間にか変わっていることで、それを聞いている人との関係性も変わってしまう、観客が自身の立ち位置を問い直す必要が生まれてくるということが重要だと思っています。

橋本 本公演では、1935年に第一回芥川賞を受賞した石川達三の小説『蒼氓』の一部をテキストとして新たに取り入れました。リサーチをしていると、移民船のなかの様子などブラジルへの移民について語るとき、この小説が引き合いに出されていることが多かった。そして小説としても非常におもしろい。劇中、僕の語りが祖父の語りとなりはじめるところで「この『蒼氓』を読んで僕は移民たちの生活に思いを馳せました」というセリフを言っていたのですが、当時、祖父がこの本を読んでいたかどうか、実際にはわかりません。でも読んでいたことがあり得る可能性の一つだし、祖父以外の、日本を出てブラジルに向かう誰かが読んでいたのかもしれない。祖父を通して、祖父を含めた当時の移民について語る、ということが重要だったので、それがフィクションだったとしても構いませんでした。

また、移民の経緯については家族から詳細に話を聞くことができなかったので、その欠落した部分を、誰かが書いた記録、記憶として、フィクションが補うという関係性もおもしろいなど考えたんです。何もない状態から祖父の語りを「捏造」するのは、たとえ僕が家族であっても個人的にすごく抵抗がありました。そこで、僕と祖父の間に『蒼氓』という「物語」を置くことで、移民についての話を舞台上で語る事ができたんです。



——「おじいさんになる」ことで言うと、橋本さんのおじいさんの名前も「ハシモトキヨシ」なんですね。サン・パウロ移民博物館のWEBサイトに、ブラジルへと渡った移民船の乗客名簿がPDFで公開されています。パフォーマンスでは、その名簿のなかにある「Hashimoto Kiyoshi」という名前がプロジェクションされました。

山崎 この場面、あるお客さんに「ホラーかと思った」って言われたんです(笑)。目の前にいる、30代に見える人が実は半世紀以上前の移民船に乗っていた人だったというのはたしかに怖い。それは現実の方がフィクション化するような効果が生まれていたということで、観客が足場になっているはずの現実を揺るがすことができたということだと思うので、うれしい感想でした。



公演を終えて

——2年間かけて、丁寧につくりこんでいった作品ですが、本公演を終えていかがですか。

山崎 ワークインプログレスを経て、1年以上のクリエイション期間をいただいていたので、本公演に向けてもうすこし別の作品になってもおもしろかったかなとも思わなくてもいいですが、作品としては満足できる内容になりました。ワークインプログレスというかたちで試演をしたうえである程度の時間をかけてクリエイションをすることができたぶん、リサーチに時間をかけるだけでなく、パフォーマンスの狙いや効果を精査して組み立てることができたのは大きかったですね。

橋本 結果的に満足のいく作品ができたので、y/nとしても僕個人としても、率直に喜ばしいことだと思っています。

じつは母親が観劇に来てくれました。「母親としてではなく、いち観客として楽しめた」と感想を伝えてくれて。子どもに言っていることなので、もしかしたらどこまで本心かはわからないんですけど(笑)。親として共感するのではなく、パフォーマンスのおもしろさを感じとってくれたのは、とても健全なことだと思います。作品を介して、僕自身が家族と別のつながりができたように感じています。どこか風通しがよくなったというか。それはこの作品が扱ったルーツの複数性、つながりの複数性といったテーマともリンクします。ほんとうに作品のリサーチを通してでなければ、聞けなかったような話がたくさんあって。もちろんそういうコミュニケーションを日常的に家族とできる人もいると思いますが、僕はできていなかった。その意味でもやれてよかったし、僕の周りに現実的な変化が起こったことをうれしく思っています。



聞き手・編集協力：及位友美(voids Inc.)
写真撮影：菅原康太
デザイン：岡部正裕(voids Inc.)

【公演概要】

多文化共生とアートに関するリサーチ(クリエイション)
y/n『フロム高円寺、愛知、ブラジル』

公演日程：3月3日(金)～5日(日)

会場：東京芸術劇場アトリイースト

主催：東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

※ 本事業は「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」の一環で実施しています。

東京
芸術
劇場

Tokyo
Metropolitan
Theatre



だれもが文化でつながるプロジェクト

もう一つ、母親から「日本だけでなくいろんな場所で、いろんなところに行った日系の人たちに、この作品を見てもらうことは意義のあることだから、ぜひ再演をお願いします」と言われて。今回、主な観客としては日本に住んでいる「日本の人たち」を想定して届けていましたが、y/nは過去の作品も含め、すべての作品をレパトリー化していきたいと思っているので、そういった可能性は探していきたいですね。

—— 公共劇場で発表するという点について、意識されたところはありましたか。

山崎 もちろん自主公演ではないので、外部からいただいた依頼に対してどう応えるか、打ち返すかという視点はありましたが、それは公共劇場だからというよりは依頼された仕事にどう応じるかというスタンスの問題ですね。ふだんから作品のテーマを選定するとき、公共的なこと、なんらかのかたちで社会に働きかける効果をもつようなパフォーマンスをつくりたいと、個人的には思っています。そういう意味では、あまりいつものクリエイションと変わらなかったような気がする。

橋本 言い方が難しいのですが、公共だからこそ、しっかりとおもしろい作品をつくらないという気持ちはありました。もちろん作品をおもしろくしたい、ということはいつも思っていることなのですが……。自分たちで主催をしているときよりも十分に恵まれた環境でクリエイションをおこなえたので、それにきちんと「成果」として応えるという意味でも、僕たちが今回の多文化共生の企画の「前例」のひとつになる、という意味でも最後までいい緊張感がありました。

y/n(橋本清+山崎健太)

2019年結成。演出家・俳優の橋本清と批評家・ドラマツルクの山崎健太によるユニット。リサーチとドキュメンタリーの手法に基づいて私的な領域の事柄を社会構造のなかで思考するパフォーマンス作品を発表している。ユニット名はyes/noクエスチョンに由来し、二項対立や矛盾、答えに達する以前の状態を意味する。これまでの作品に男性同性愛者のカミングアウトを扱った『カミングアウトレッスン』(2020)、セックスワーカーと俳優の仕事を扱った『セックス／ワーク／アート』(2021)、日本における手品の歴史を扱った『あなたのように騙されない』(2021)、東京芸術祭ファーム2022 Farm-Lab Exhibitionでの国際共同制作によるパフォーマンス試作発表『Education(in your language)』(2022)がある。